

描画に対する心理的距離感と描画の抵抗感の関連について

金川友美

(山口大学大学院教育学研究科)

目的

近藤(2016)は、実際に描画を行う前に何を描くかを計画する段階である「描くための基準」は、以下の3つに分類されると指摘している。具体的には、1) イメージ主体:「描きたい描画を重視して描画」するものであり「内面に生じたイメージをそのまま画用紙に描こうとするもの」。2) 現実主体:「現実的な描写を重視して描画」するものであり「物質世界との類似性を高め、アイテムの対象化を重視する描き方」。3) バランス主体:「画用紙全体から見てのアイテムの大きさや配置関係の安定感を重視した描き方」。さらに、イメージ主体、バランス主体、現実主体の順に、「描き手と描画との距離(描画に対する心理的距離感)」が遠く主観性より客観性が強くなるとしている。

描画における「ポジティブな心理的影響」に関わると考えられる「抵抗感」について友竹(2015)は、「描画における自己表現への抵抗感を描画開示抵抗感と定義」し、「描画開示抵抗感」は「自己開示を行うとき(話すとき)に感じる開示抵抗感と類似した因子構造」であると指摘している。

以上より、描画における自己表現の程度を表すとされる「描くための基準」と、描画において自己開示を行うときに生じる「描画開示抵抗感」には関係があると想定される。

そこで本研究は「イメージ主体」と「現実主体」という描画に対する心理的距離感の異なる2つの主題における描画抵抗感の違いについて探索的に調査する。

方法

参加者 大学院生2名(女性)

材料 課題文2種類、コピー用紙2枚、クーピーペンシル(12色)、新聞紙

課題文 「イメージ主体(課題①)」、「現実主体(課題②)」の描画を参加者が行うことをねらいとした文章を設定した。

手続き 描画1(約45分):参加者に、課題①を提示する。課題②を見て、「どのような絵を描くか」をイメージしてもらい(3分間)。実際に描画を行ってもらい(約15分間+延長あり)。描画に関する

インタビュー(約15分)。休憩(約5分間)を挟む。描画2(約45分):描画1と同じように行う。

カウンターバランスをとるため、参加者2名の課題①と課題②の順番を入れ替えて提示した。

結果

インタビューの逐語録から各参加者の「抵抗感」、「ポジティブな心理的影響」、「自己表現」に関する発言をそれぞれの課題ごとにまとめたものを示す(表1,表2)。「課題文」グループの参加者2名を、参加者A(課題文①→課題文②)と参加者B(課題文②→課題文①)とする。

考察

結果より、「描き手と描画との距離」に近い描画課題では自己表現できたという感覚が促進された。また、「描画開示抵抗感」もみられなかった。この理由として、「自分の中のイメージ」という課題文がより深い自己表現を促したことで、課題の自由度が高く描き間違いへのストレスが少なかったことが考えられる。「描き手と描画との距離」に近い描画課題は、描画者の豊かな自己表現を負担なく導くことができる可能性がある。そこで臨床場面において、クライアントのその日の気分を話し合ったり、関係づくりのきっかけとして用いることができると考えられる。

表1 課題①(イメージ主体)に関する発言

	参加者A	参加者B
抵抗感	「抵抗感は特になし」	「緊張やためらいはなかった」
ポジティブな心理的影響	「楽しい」	「気分が良い」
自己表現	「これは自己表現だと思う」「自分の中にあるものを表現できた」	「自分の気持ちや気分、自分の状態(からモチーフを考え)描いた」

表2 課題②(現実主体)に関する発言

	参加者A	参加者B
抵抗感	「塗るのがめんどくさい」「抵抗感は特になかった」	「難しかった」「思い出せないことへのモヤモヤ」「画力的にも描けなくてモヤモヤ」
ポジティブな心理的影響		
自己表現	「自己表現はできてない」「オリジナリティは出せなかった」	「状況は100%表現できた」